



Title	北海道大学附属図書館報「榆蔭」
Citation	, 88, 1-21
Issue Date	1993-11-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/66451
Type	periodical
File Information	yuin88.pdf



[Instructions for use](#)



榎 蔭

Yuin

北海道大学附属図書館報

目 次

○偶 感 工学部教授 新保 勝…………… 1	○資料紹介……………15
○CCoD マルチ検索システムの運用その後 …… 3	○本学教官著作物……………18
附属図書館情報システム課学術情報掛	
松尾博朋	
○研修・講習会などから…………… 5	○会 議……………19
○ニュース……………10	○研修・講習等……………20
○お知らせ……………12	○人事往来……………21

偶 感

工学部教授 新 保 勝

図書館は本がなければ成り立たず、人がいなければ成り立たない。実際、図書館にはいざとなると、本と人に抛り所を求める何かがある。そうでなくとも、ぶらりと入って手にする Who's Who といった紳士淑女録もその類だろう。そういう意味では、文献検索で書籍などを探すのを能動的というなら、図書館は受動的ながら知的な世界を先方から広げてくれる格好の場でもある。また、静寂の中で人に接し、思索の場、心のやすらぎの場とすることもある。しかし、学術情報の増加や多様化に対処して、本学の新しい図書館システムの将来構想は逆説的に言えば、本を無くし、電子図書館へと、さらには人を去り、自動検索、完全自動書庫方式へと目指している。

10数年前、アメリカのコネル大学を訪れた際、大学の図書館で日本の書籍や雑誌、週刊誌を数多く見だし、驚いたことがある。日本の事物について他大学から調べにくる位であると聞いた。その後、本学とは学術・教育交流協定が結ばれ、ファルコン・サマープログラムによる日本語研修を本学で定期的に行っていることでもあるから、関係する書籍の豊富さは、さもありなんと思える。ついでながら、その図書館では市民にも書庫を開放の上、夜間はもとより、土曜、日曜も開館していた。係員はといえば、教授夫人や学生がアルバイトで手伝っている様子だった。

利用者は図書館員と一般には図書の貸出や返却、予約の現場で接触するものの、それを支える日常的な仕事となると、直接には目にふれない部分である。蔭では運営に並々ならぬ努力を払っていることであろう。本学の附属図書館が土曜日の開館に踏み切ったのは、館員がプロ意識に徹してのことと聞いているし、こんな背景を踏まえてのことだったのではないかと考えている。実際、かつて参考調査掛に資料の所在を問い合わせたところ、こちらが根負けする位に調査を徹底的にして貰い、思いを新たにすることがある。これが今回の意欲的な新図書館システムの立案につながるであろう。

本学附属図書館の将来構想については既に解説がある。この種のサポート体制の完備は研究者にとって、企業が特許戦略に血眼になるのと同様、必須のものになりつつある。そして、新構想の中心はワークステーションを要素とするネットワークシステムの構築が基本になっている。こうした分散処理化、局所インテリジェンス化は時代の趨勢であり、図書館はもとより、各種の計算センターとて例外ではないと思われる。利用者側からすれば、情報流通の便利さやマルチメディア対応といった機能拡張の面で当然のことであり、将来構想の企画にあたっては、メインフレーム一辺倒から意識の切り替えが必要になっている。

ところで、図書館はある意味では装置産業に似たところがある。合理化や高速化、省力化のためには、設備の購入に重点を置くのは止むを得ない面があり、こういった、機器を揃える基盤整備が先決になり、改革の目玉になる。とは言え、コンピュータがからんだシステムのハードウェアとソフトウェアは車の両輪である。その場合はどういう運用システムを採用するかにも興味があろう。言いかえると、それでどういうことができるか、である。例えば、図書館の情報検索システムならば、データベースの検索システムはどういうものかに関心が移ってくる。あるいは、その辺は既存のもので充ちていて、動かす余地の無いところなのかもしれない。しかし、そういった視点があってもよさそうである。

文献検索でキーワードを入力したときに該当するものが出てくるという検索システムはそれだけでも便利である。しかし、利用者の立場に立って、より使いやすいものはないか。言わば、もう少しシステム側でやれることはないか。例えば、ファジィ文献検索というのがある。通常の文献検索はキーワードがあるかないかで二値的な索引付けを行なっている。一方、ファジィの方はキーワード間の関連性を利用して、索引の重みをブール代数 1, 0 モデルの基礎となるブール論理を拡張したファジィ論理を用いて連想的に推論し、検索を行なうものである。キーワードの有無による従来のブール検索では、求める文献は索引付けした文献集合からランダムに検索してくるだけである。それに対し、ファジィ文献検索では重要度に従い、ランク付け出力を可能にする。しかも、データベース化する時に索引付けし忘れた文献をも検索する点に特徴がある。

それも、従来モデルのやり方でシステムに蓄積した文献集合を基にキーワード間の関連行列を構成し、利用することが可能である。こうして作った関連語のファジィ集合と文献とのマッチングを取れば、重要性の度合いが定まり、その結果、キーワード間の関連に基づいた文献を必要なものから検索することになる。そうなれば、あるいは、学術情報センターの検索システムで検索画面が機械的に北海道大学分表示することが少なくなり、煩雑な書物の貸借業務を減らせはしないか。もっとも、この辺の大規模システム化はまだ先の夢なのかもしれない。目下は既存の検索システムを利用するとしても、早晚、もっと知的な情報システムが動き出す時もこよう。本学の図書館にもこういった点を検討するような研究開発部門が欲しいところである。

ともかく、新図書館システムの構想が固まり、その第一歩を踏み出した。完全自動デリバリー方式も時代の必然であろう。かつて見た某大学のAVセンターにおけるビデオカセットの自動搬送システムは物流システムのそれであった。そうすると、ぶらりと書庫に入って知的遊泳の一時を過ごすという訳にはいかななくなるが、将来の学術情報システムの整備を考えるなら、それも止むを得ないところかもしれない。新システムの実現に向けて今後の進展を大いに期待したい。

(工学部前図書館委員)

CCoD マルチ検索システムの運用その後： 利用者の声から

附属図書館情報システム課学術情報掛 松 尾 博 朋

「Current Contents on Diskette with Abstracts. Life Sciences」のデータを、同時に複数の利用者が研究室等のパソコンを通じて検索できる「CCoD マルチ検索システム」は、運用開始から既に数カ月経過し、順調に稼働しています。現在図書館では、'94年版外国雑誌購入のための作業が始まっていますが、カレントコンテンツ(ライフサイエンス)について'93年版の購入部数と'94年版の購入部数を比較してみたところ興味深い現象がみられました。

表： カレントコンテンツ(ライフサイエンス)の購入部数の変化

誌	名	部数の変化
Current Contents on Diskette.	Life Sciences. J-1200	9→4
Current Contents on Diskette.	Life Sciences. J-600	1→0
Current Contents on Diskette with Abstracts.	Life Sciences	3→2
Current Contents.	Life Sciences (冊子体のみ)	21→13

上記の表は CCoD (Life Sciences) の全学の購入部数の変化をあらわしたのですが、約半分に減少していることがわかります。このシステムでは、最初に接続のための若干の機器を購入しさえすれば以後は無料でいつでも研究室等から CCoD の検索が可能となるため、これまで講座予算などで CCoD を購入していたところが接続を機に中止したためと思われます。これから CCoD マルチ検索システムの運用はかなりの効果をあげていると考えられますが、実際に利用者の感想はどうでしょうか。

そこで今回、CCoD マルチ検索システムの利用申請をしている方を対象に簡単なアンケート調査を行い、使用後の感想などを聞いてみました。調査は、HINES の電子メール機能を使って質問表を送り、回答も電子メールで回収する方法をとりました。CD-ROM マルチ検索システムのユーザーへの各種連絡用として HINES のクローズドフォーラム「f. CDRom: sys」が開設されていますが、CCoD マルチ検索の利用者についても同じクローズドフォーラムを使い、CCoD の新着状況の通知など各種連絡に使用しています。そこで、質問表をこのクローズドフォーラムのメンバー 65 名に送付しました。その結果、3 カ所から回答があり、うち 1 カ所からはその講座の構成員 7 名の回答が含まれていたため、回答者総数は 9 名となりました。質問の内容は、1) 使用の頻度、時間帯、2) 使用の目的、3) 使用した感想、4) その他意見、要望など、でした。以下にその回答のいくつかを紹介し、若干の考察をしてみたいと思います。

1) 使用の頻度, 時間帯

頻度については, まだ使ったことがない, 1度だけという人もいましたが, 週に1度以上という人が3名いました。これはカレントコンテンツが週刊であるためのようです。また月1度という人も2名いました。時間帯については, 月1度以上使っている人に限れば, 午前中と夕方(午後5時以降)が多いようです。また特徴的なことは, 週1度検索する人のうち月曜日とか土曜日など毎週決まった曜日に使用すると答えた人が3名中2名いたことで, 定期的に文献調査を行っていることがわかります。

2) 使用目的

ほとんどが「最新文献の検索」という回答でした。また学生の方と思われるが「ゼミの文献探し」という回答が3名ありました。

3) 使用した感想

これまで講座予算でCCoDを購入していたが, マルチ検索システムの完成を機に切り替えたという方が「使い勝手はこれまでと変わらず良い」と回答しているのをはじめとして, 使用感についてはおおむね満足しているようです。しかし一方では, 「慣れたら簡単。でも使用しないと忘れる。プリント1枚位のマニュアルがあればよい」, 「ちょっと操作がめんどくさい」, 「やっぱり使い方を覚えられない」, 「今まで, コンピュータの類をほとんど使ったことがないので, 使用方法が難しくて覚えられなかった」という意見もありました。図書館では運用開始と同時に詳しいマニュアルを作成, 配布しましたが, そのほかに検索途中でわからなくなったときにすぐ参照できるようなクイックリファレンスガイド的なものの作成も検討する必要があると思われます。

4) 意見, 要望

「CLARKと同じようにRS232C接続しているすべてのコンピュータからaccessできるようにしてほしい」, 「新しい研究テーマを始めるとき, CCoDを過去にさかのぼって検索したいが, 6カ月分では少なすぎる。3年分, 出来れば5年分の情報が欲しい」, 「Life Scienceだけでなく, Agriculture & Environmentも入れた方がよい」, 「もっと長期の文献検索ができるようになればいい。マルチで6個までは少ない」等の意見がありました。他の分野の情報や, さらに多くの情報を同時に検索したいという要望が多いようです。これらの要望については, 予算の関係や技術的な問題もありすぐ実現することは難しいですが, よりよい情報サービスを実現していくための参考とさせていただきます。

以上アンケートの結果をもとに若干の考察をしてみました。

最後になりましたが, お忙しいなか調査に協力していただいた利用者みなさんに感謝いたします。

◆ 研修・講習会などから

「平成5年度大学図書館職員長期研修」に参加して

附属図書館情報管理課図書受入掛 松 本 禮 一

今日、大学における教育や研究活動の進展に伴い、学術情報の量的な増加や質的な多様化が進んでおり、独創的先端的な学術研究を生み出すための基盤として、利用者が必要とする学術的情報を迅速かつ的確に提供することが重要となってくることから、その中核的な情報資料センターとしての大学図書館の職員が、学術情報に関する最新の知識を修得して、職員の資質と能力の向上を図ることにより、大学図書館の情報提供サービス体制を充実することを目的とした、文部省及び図書館情報大学主催による大学図書館職員長期研修が、本年度も全国各地から国立35名、公立1名、私立6名の計42名(男性29名、女性13名)が参加して7月19日から8月6日までの3週間にわたり、図書館情報大学を主会場に、筑波大学附属図書館、東京大学附属図書館、学術情報センター、慶応義塾大学三田メディアセンターなどの8会場で、講義・見学・実習・共同研究討議などが実施されました。

講義の内容としては、大学図書館の役割や管理運営、学術情報の流通とネットワークの形成、キャンパスネットワークの役割と整備、データベースの整備と利用、学術情報センターの活動と役割、大学図書館におけるこれからの情報システムなどがありました。これらの講義においては、大学図書館とは、大学の教育や研究を支援するために存在し、大学図書館が置かれている現実的な学内環境を再点検させ、新しいサービスの展開への手がかりを与えてくれるものでした。

本来でしたら、講義や見学で得た新しい発想や知識や技術についてお知らせすべきでしょうが、今回は、自分が意識改革させられたことについて述べさせていただきます。それは開口一番“日本ヲ背負ッテイクノハ、アナタ達デアル、アナタ達が頑張ラナケレバ、日本ハ、潰レテシマウ、今ハ、戦争中デアル、情報トイウ名ノ!”で始まり拍手喝采をもって終了した、「日本の研究者と大学図書館」と題して講義された、日本人よりも日本人らしい、京都大学助教授のカール・ベッカー先生の講義でした。講義の内容もさることながら、講義中は一人一人の目を見て放さず“金縛り”の状態にさせられた講義は、今までに経験したことがないものでした。講義を終えた時には、自分も大学図書館の図書館員として、微力ながらも一生懸命頑張らなければという気持ちにさせられました。

また、研修中のグループ討議では、あるテーマについての現状分析と問題点を討議し、対応策・解決策・未来像を探り最終日に発表するというもので、これは普段から様々な事に問題意識をもち蓄積された知識がなければ、なかなか話題の中へ参加できないというもので、これからはこれを契機に勉強をしなければと、反省させられることになりました。

つくばのエキスポセンターにあるH2ロケットを、毎日、図書館情報大学の寮の窓から見ながら講義や見学に通い、感心、感激、後悔でいっぱいの研修期間は、あっというまに過ぎましたが、3週間というまとまった時間を“これからの大学図書館”について勉強させてもらったことは、自分にとって大変貴重な経験となりました。

また、この研修を通じ、全国各地から参加した研修生と親睦を深め、情報交換のできたこ

ともまた大きな収穫でした。そして最後に、職場の理解と協力を得て、この長期研修に参加できたこと、文部省、図書館情報大学、各施設並びに各講師の皆様方にも大変お世話になりましたことに、この紙面を借りてお礼を申し上げたいと思います。

全国図書館大会が札幌で開催されました

附属図書館情報管理課図書受入掛 午 来 信 子

IFLA 東京大会の時、初めて日本で開催されるのだから、と参加したのと同じ様に、札幌で開催されるのだから、ということで全国図書館大会にも初めて参加してみました。大会要項の名簿によりますと、参加者は1700名余りでしたが、当日申し込まれた方もたくさんいらしたようです。北大附属図書館からは13名でした。その中には組織委員、発表者、運営担当者など仕事をもって参加した人と、私のように開会式、分科会、全体会、展示会と気の向くまま見聞できた人もいました。

明治39年を第1回として始まった全国図書館大会が、今年度79回目を数え札幌で開催されました。北海道での開催は昭和43年の「札幌・江別」に続いて2回目の開催となりました。大会年表を見て思うことですが大正9年は開催地が満鮮各地となっていたり、昭和10年は京城、昭和11年は満州で開催されていました。また昭和15年から22年までは大会が中止になっています。主要事項な



どを追ってみますと、時代の影響を色濃く反映し、図書館の存在を確かなものにしてきたことが伺えました。今大会は「北の空から新しい風を一未来をきり拓く図書館活動を！」をテーマに9月29日から10月1日まで開催されました。

第1日は開会式、表彰式があり、日本図書館協会事務局長の酒川玲子さんより、生涯学習ということが言われる中で、図書館が複合施設の中に取り込まれ本来の図書館の役割を見失いかけているのではないかと、読み、考え、学ぶということを保障する場としての図書館の役割を認識すべきであり、日本全国の図書館の1/2にコンピュータが導入されている現実から、学校図書館、公共図書館、大学図書館の館種を越えてネットワークによってサービスする時代である。図書館法に関する問題として館長の司書資格問題、また図書館の運営依託問題、さらに昨年108の新図書館ができたが、1年間で売れた本が9億冊であったのに対して、貸し出された本は3億冊というのが現実であり、出版社、書店、図書館の連携をも考えて行くときにきているとの基調報告がありました。

記念講演は「宇宙からのメッセージ」と題して毛利衛さんの、ビデオを見ながらの講演でした。人類の英知の現場 (= 図書館) で働く皆さんに、これも人類の英知の最先端である宇宙に 8 日間滞在し実験し、様々の体験をしてきた私がお話します。といて始められ白い太陽が輝いていたこと、液体はすべて球になること、地球の一日を 1 時間 30 分で一回りし、1 日 16 回の朝日、夕日を見る世界、宇宙という場にいると、物の大きさ、時間も相対的なものであることが実感できる。図書館の知識はシュミレーションの知識で、実際に体験したこと、考えたこととは違う……アツと言う間に時間がたち、毛利さん自身はたくさんの体験をしてきたが、一方的に話す立場から、質問を受けるかたちのなかで、彼自身の中で眠っている事柄を引き出したい、と質問を受けられました。健康法については、フィットネスセンターでエアロビクスをして気分の転換を計っていた、あとは日常の健康を保持していれば宇宙にはいけるそうです。実験のために持って行った小動物のその後については、錦鯉は解剖されて詳細なデータがとられ、その後小片にして実験が続けられている(実験動物に対するこのかわいそうな結末は、動物愛護の観点から米国民の強い批判が予想されたので、公表はされていない)。また宇宙から帰って来た動物であります僕は元気です、と言って笑いを誘っていました。地上のハンディキャップは宇宙ではハンディキャップにはならない、としてホーキング博士のことを話されました。知識、知能、思考を持った人間が生きていけることを強調していました。

第 2 日は分科会でした。12 の分科会において発表・討議が行われ、私は第 3 分科会大学図書館の部会に参加しました。この部会のメインテーマは「大学図書館の未来を探る」ということになっており、大学図書館のオピニオン・リーダーの話し合いに期待するとともに、大学図書館の置かれた現状分析、学情システムのゲートウェイとしての図書館の役割など、近未来を洞察する近藤北大図書館長のご挨拶がありました。

この部会の基調講演として、「情報生産のための図書館」と題して学術情報センターの橋爪先生より講演がありました。James Thompson の“The end of libraries”の



中で言った言葉「1980年代にはコンピュータの発展により紙なし社会が来る」、(この言葉は図書館関係者のなかで揶揄的に語られてきた言葉であったが) はたしてどうなのであろうか、と言うところから話だされ、Internet の歴史が語られました。それは 1970 年頃展開された米国防省の ARPANET であった(その後日本では N-1 ネットワークが開発され、英国の JAIN も ARPANET を典拠としている) 国防省から研究費を得た UNIX という種類の基本ソフトウェアの研究をおこなっていた研究者によって、研究スポンサーの ARPANET の通信機能が組み込まれ……UNIX がすべてを変えることになった。大学では NSFNET ができ、NASA では NASANET、国防省は DoDNET などが成立した。これらは ARPA 時代の UNIX ネットワ

ークを踏襲しているため相互接続には問題はない。こうして新世代の ARPANET ができ、この連合体が Intertnet と呼ばれてネットワークの標準方式になった、ということであった。又、Internet で論文の流通がないのは、「情報蓄積の安定性・恒久性がない」こと、大学や学会、協会の機能である権威づけの問題があり、この2点がクリアできるかどうかを試金石である、と指摘されました。図書館のリストラのための1シナリオとの副題のとおり、「古いのはそのまま残し、新しいものもやる」という訳にはいかない、新しいものを創ることに主体的に関わるべきであり、例えば目録作業に於ける目録法は今後意味をなくすことになる。選んで情報を提供することから、本のサイズも含めてまるごとスキャンするということになるであろうし、効率よく、曖昧な事柄からの検索ができることが必要であり、利用者にとって無意味、意味不明なものは不要であり、目録は利用者のために作っているもので、目録規則のためではない。電子図書館とは、研究者に論文を書かせるシステムである。電子図書館の運営・管理には、専門知識（特に情報生産の）を持つ多数のスタッフが必要になる。決して無人図書館ではない。そして最後に、Internet ができてもう30年になるので、そろそろ駄目になるでしょう、しかし3年はもつでしょう、といて笑わせました。(途中この基調講演の中で学術情報センターの安達先生から、電子図書館に関する提案が付加されました。大変具体的で興味深いものでしたが、ここでは省略します)

「10年後の大学図書館の目指すもの」と題して小西和信さん(上越教育大)より全国総合目録形成に関わった、この10年とそれ以前の10年、ユニオンカタログに関わった10年を彼自身の経験のなかで紹介し、これからの10年先をみるスタンスで話されました。

「適時に適書を適者に」と題して佐藤貞司さん(北海道教育大)からは、ALAのモットー“*The right book to the right reader at the right time*”に彼流の訳語を与え、大学図書館の未来を洞察するものであった。

「エレクトロニックキャンパス時代と大学図書館」と題して宇野弘純さん(北海道大学)からは、蔵書300万冊中70%はオンラインで検索が可能である北大の現況、2年前に学内LANが敷設されたこと、北方関係総合データベース構築に着手したこと、平成7年度にはワークステーションによる旧システムとの入れ替え、将来像検討委員会からの話題提供などの報告があった。

「共同で知的作業をする空間としての大学図書館」と題して乳牛克憲さん(静修短期大学)からは、教育・研究・学習の連携と調和、大学図書館から見た社会特性と課題などが身近な話題をもとに報告されました。

第3日は全体会で12の分科会からの報告があった。各分科会の議論のポイントが解り易く説明された。特に印象に残ったのは第8分科会で、功労者表彰された「ふきのとう文庫」の小林静江さんに関する話題でした。図書館利用の困難な障害をもつ子供や病弱児に本の貸出をする一方、図書館が障害者サービスに力を注ぐことを願って活動するグループの代表者で、その活動は1976年に身障者用書籍小包は料金半額とさだまった原動力となったのだそうです。閉会式は来年度は鳥取県で開催されること、テーマは「手をつなぐ日本の図書館：ネットワークの広がりをめざして」であることが紹介されました。

最後になりましたが、展示会の様子を少し書いて終りたいと思います。サッポロファクトリーホールにおいて「ヤングダルト(12歳~18歳)の本」、「図書館・ニューメディア」展として大会期間中開催していました。その中でとても興味をひかれるものがありました。その1つ「自動貸出・返却・入退館システム」です。これはカードの利用によって入館管理、利用統

計がおこなえ、貸出は利用者が装置にIDカードを挿入すると個人情報を照合して、貸出、返却、貸出延長をタッチパネルで選択し、本を所定の位置に置くとバーコード(OCRラベルも可)を読み取りホストコンピュータに貸出、返却を確認するものです。これはカウンターに手続を依頼したくない人に、また試験期の混み合う時期にとっても便利かと思います。手続を選択できる時代から、貸出、返却は利用者が行う時代になるのかもしれないと思いました。もうひとつは、「調湿機能付き書架」でした。これは書架と棚にボードを組み込むことによって調湿するものです。ボードはそれ自体が一定の湿度を記憶しており周辺の湿度変動に対応して短時間で吸湿、放湿をくりかえしあらかじめ記憶した一定の湿度に保たせる機能をもっており、記憶湿度は紙の保存に最適とされる60%に調整してあるということでした。大気汚染性ガスの吸着機能(吸着のみで、放出はしない)をもっているそうです。類似機能材である「桐」に比べ安価で、機能的に優れていると説明していました。過去に新築書庫に図書を移動したことがありました。湿度計を置き1日2回、半年ほどでしたか記録を取ったことがありましたが、効果的な対策を講じることができなかったことが思い出されました。

今大会の開催に携わられた方々のご苦勞に敬意を表しまして、散漫ですが報告を終わりたいと思います。

- * Internet に関しては講演の中で紹介されていました、廣田とし子「インレーネット：いま話題のネットワーク」(現代の図書館 Vol. 31 No. 2)が参考になります。
尚、「現代の図書館」の同じ号に以前面識のありました、谷口敏夫のさん論文「ハイパーライブラリー：ハイパーテキストとしての電子図書館」が載っていました。私には難解ですが、それでも緻密で、簡潔で、事実を見据えた美しい文章だと思います。一読をお奨めします。

第36回北海道地区大学図書館職員研究集会在開催されました

本年度の研究集会は、平成5年8月6日(金)、札幌医科大学を会場とし、下記プログラムにより開催され、北海道地区の23大学134名及び加盟館以外の団体から10名のオブザーバーの参加があった。当日は、各参加者とも終始熱心に傾聴し、有意義かつ盛會裡に終了した。

当番館挨拶	札幌医科大学附属図書館長	福田 守 道
講 演「サイコオンコロジーとは」	東札幌病院長	石 谷 邦 彦
〃 「日米大学図書館会議の印象」	北海道大学附属図書館長	近 藤 潤 一
研究発表「ネットワークシステムと利用者サービス」	旭川医科大学	小 川 聡
〃 「UNIX版CD-ROMを使用した文献検索」	札幌医科大学	福 井 堅 一
〃 「私が訪ねたアメリカの図書館」	北海道大学	菊 地 圭 子
〃 「英国大学事情—ノーザンブリア大学における図書館学教育の周辺—」	藤女子大学	下 田 尊 久

開会にあたり、福田守道氏は「最近の大学図書館の様変わりには、かつて、A.トフラーが説いた「情報化の波」が、今、大きなうねりとして押し寄せてきている状況であり、情報化の中心、集約場所が図書館である。新しい波への勉学の場として研修の実を挙げられたい。」と挨拶され、引き続き講演が行われた。

石谷邦彦氏は、最近、ホスピスケア(がんの終末医療)が話題になっているが、「サイコオンコロジーとは、臨床腫瘍学と社会科学や精神医学などの接点から体系付けられた新しい学問

である。」とし、今日のがん医療における緩和ケアの役割、評価、将来展望について、実際の緩和ケア病棟 (PCU) での臨床例、医療プログラム等を交えて話され、「今、医療に“やさしくあたたかい医療とケア”の充実が求められている。がん患者の医療を、QOL (生活の質) を向上させるという全人的立場から認識し、緩和的医療として体系付けることが重要である。」と講演された。

近藤潤一氏は、日米双方の大学図書館の現状報告と意見交換の中で、エレクトロニックキャンパスの構築、図書館における人材育成、資料の保存、図書館サービスと著作権、科学技術情報へのアクセス、日本研究及びアメリカ研究に関する図書館資料の収集及び人的交流についての相互協力、などが討議されたが、「資料交換、相互利用に関する日本の手続きの煩雑性、日本における国際的データベース構築の遅れとアクセスの複雑さ、又は、日本の大学の研究支援体制の遅れ」等を、日米の大学図書館の現状を交えながら指摘され、「学術コミュニケーション過程における図書館及び図書館員の位置付けと、将来の方向について、アメリカの場合、危機感を持って真剣に憂色をたたえて論議しているが、日本では現状認識において甘さが感じられ、日米間での大きな落差が痛感される。図書館の可能性は、結局は、この学術コミュニケーション過程に統合された一部分として生きる他はない。大学がこれから国際社会の中で全領域にわたって立ち向かうには、学術情報の網羅的な平等性の中で研究基盤を確立し、思惟ある立場で人類に貢献する力を備えていかななくてはならない。その大学の研究教育を強力に支援していくメンバー、その先端にライブラリアンの皆さんが立ち続けてほしい。」と講演された。

午後から行われた研究発表では、小川聡氏は「LANを中心としたネットワークシステムを概観しながら、図書館における利用者サービスへのその関わりについて」、福井堅一氏は「UNIX版 CD-ROMでの文献検索についてその構成と実際について」、菊地圭子は「訪問したアメリカの議会図書館、国立医学図書館、国立農学図書館、メリーランド大学カレッジパークキャンパス、マッケルディン図書館、国立衛生研究所図書室について、その紹介と印象について」、下田尊久氏は「英国ノーザンブリア大学情報図書館管理学科大学院留学体験から大学院教育についての実状について」、それぞれ貴重な研究と体験を発表された。

◆ ニュース

○北方関係資料総合データベース作成作業開始

北大附属図書館では当館が計画している北方関係資料総合データベース作成に対し平成5年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)が採択されたことに伴いデータベース作成作業を8月から開始した。

北方関係資料総合データベースは北大附属図書館北方資料室の集書のデータベース化。北方資料室には、北海道のほか樺太・千島列島・アリューシャン列島・ロシア極東地方・シベリア・アラスカ・北方洋とユーラシア北部の全域にわたる文献を網羅的に収集している。このような北方地域の全分野に関する文献を収集している機関は、国内には他にみられないので、その集書は北大図書館のユニークな蔵書の一つとなっている。

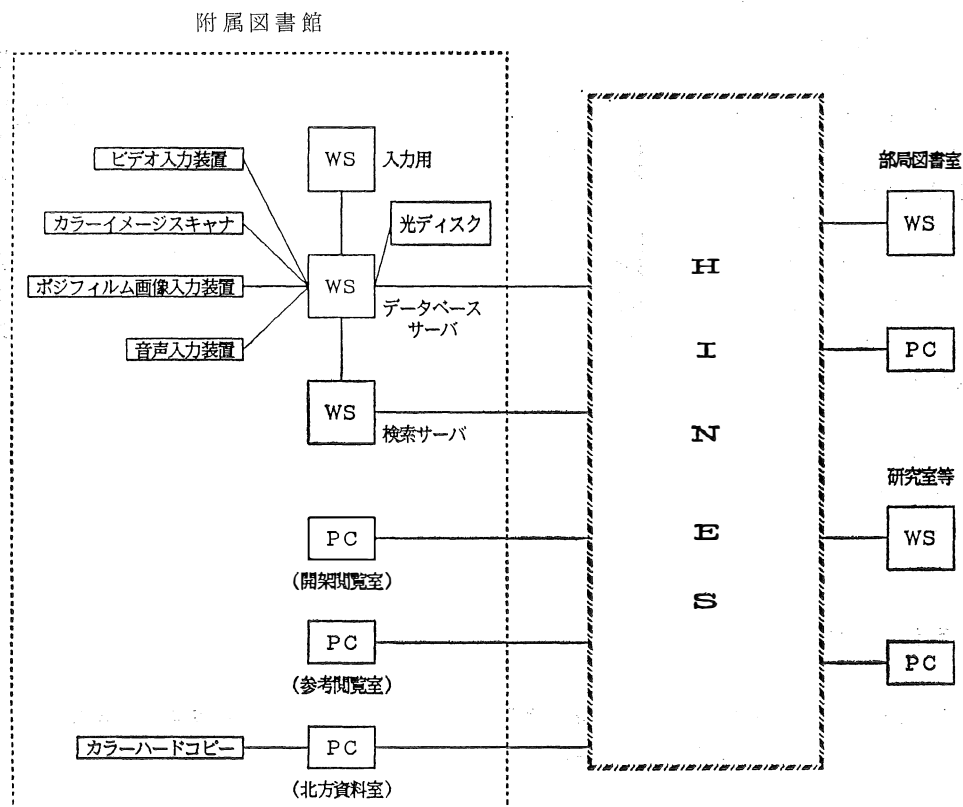
今年度データベース化を行うものは、貴重本、稀覯本に類するものを含んだ、江戸時代のいわゆる蝦夷地関係旧記及び明治期の北海道・樺太・千島等に関する稿本・写本の目録である

「日本北辺関係旧記目録」で、作業は順調に進行中である。

北方関係資料総合データベースは、この「日本北辺関係旧記目録」をはじめとして長年の研究により件名・事項・主題・解題が整備された学術的価値の高い目録をもとにして地図・写真等の画像、音声資料そのものを統合的に提供するものであるが、これに加えてマルチメディア対応の強力なレファレンス機能を有するものとして画期的なものである。

現在北大図書館が行っているネットワーク対応のサービスは MEDLINE, BIOSIS, Life sciences といった自然系のもので、自館作成の人文系データベースの意義は大きい。また、当データベースは日々北方資料室を訪れる学内外の研究者のみならず、学内 LAN: HINES を通じて、及び学術情報センターのオンライン検索システムにより、全国、世界の斯界の研究者に提供することになっている。

北方関係資料総合データベース・システム構成図



(情報システム課)

○ロシア元国務長官ブルブリス氏が附属図書館北方資料室を見学されました

去る9月6日、ロシア国際戦略研究所所長ゲンナージ・E・ブルブリス氏が北方資料室を見学されました。ブルブリス氏は、1992年ロシア連邦第一副首相、同国務長官を歴任され、現在でもエリツィン大統領側近の外交ブレーンとして、ロシアの対外政策に大きな影響力をもつ要人として知られています。このたび、外務省ほか関係機関の招きで来日されたもので、滞日中の日ロ関係にかかわる氏の言動が大いに注目されておりました。

ブルブリス氏は来道後本学に直行され、廣重総長を表敬訪問されたのち、附属図書館北方資料室を見学されました。当室では本学スラブ研究センター望月哲男助教授の案内により、樺太・千島を含む北海道の古地図のほか、日露関係史の展示資料をごらんになりました。短時間の来訪ではありましたが、感慨深げに資料に見入る氏の姿が非常に



印象的でした。ひきつづいて、附属図書館会議室においてスラブ研究センターの教官一同と懇談され、日ロ双方による人材養成センターの創設に関する協力の要請、両国の学术交流の促進について意見交換が行われました。このたびのブルブリス氏の来訪を通じて、北方資料室が日ロ間の相互理解と友好・親善のため、なにがしかの貢献をすることができたものと確信しております。

(情報サービス課北方資料室)

◆ お知らせ

○ NACSIS-IR (学術情報センター情報検索サービス) から ILL (図書館間相互貸借) システムへの申込機能の運用開始のご案内

附属図書館では、9月10日より、NACSIS-IR (学術情報センター情報検索サービス) から NACSIS-ILL (図書館間相互貸借システム) への申込機能の運用を開始することになりました。この機能は、NACSIS-IR に原報請求コマンドが追加されたことにより、IR データベースの検索結果を利用して図書館に文献複写や現物貸借の申し込みができるというものです。この際、ILL システムとも連動していますので、従来一定の書式で申し込みを行っていた原報請求を IR 端末機から研究室等に居ながらできるようになり、手続きの簡略化・迅速化が図れます。なお、利用手続き等詳細については、相互利用掛 (内線 4095, 2974)、及び各部局図書室等にお尋ね下さい。

○ 北大図書目録データベース第2期遡及入力計画2年次(平成4年度)報告

平成3年度から始めました第2期遡及入力5カ年計画2年次(平成4年度)の入力冊数は以下のとおりです。

平成5年度は30,000冊の入力を予定しております。

1. 第2期遡及入力計画2年次(平成4年度)入力冊数

部 局	和書入力冊数	洋書入力冊数	入力冊数合計
図書館本館	4,524	4,269	8,793
教養分館	6,060	189	6,249
文学部	1	69	70
経済学部	567	3,208	3,775
理学部	173	2,147	2,320
医学部	273	1,103	1,376
工学部	0	1,882	1,882
薬学部	973	226	1,199
農学部	192	645	837
獣医学部	0	613	613
電子研	293	487	780
スラブ研	0	799	799
医療短大	517	224	741
合 計	13,573	15,861	29,434

2. 第2期遡及入力計画3年次(平成5年度)の入力予定

入力予定: 30,000冊

- | | |
|--------------------------|---------|
| 1) 酸性劣化状況調査対象図書(国大図協申合せ) | 5,000冊 |
| 2) 附属図書館図書 | 10,000冊 |
| 3) 文系部局受入図書 | 9,000冊 |
| 4) 自然系部局受入図書 | 6,000冊 |

○ 土曜開館時の書庫の利用について

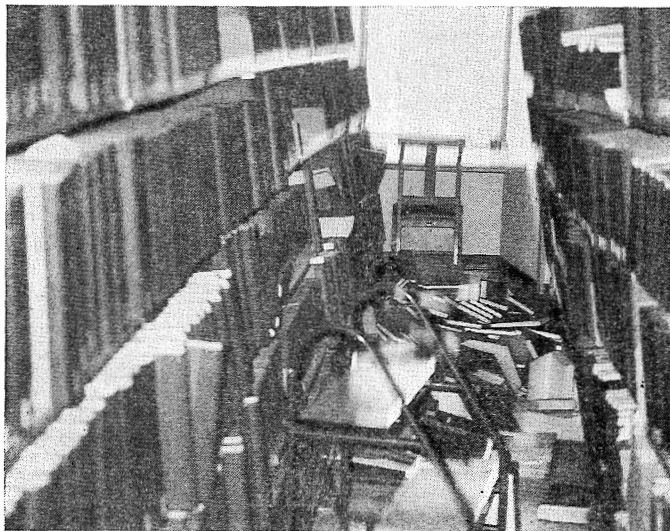
すでにご周知のとおり、平成4年5月から、附属図書館の土曜日開館（部分）が実施されております。平成5年7月より、書庫のご利用が次のように変更となりましたのでお知らせします。

利用対象者	利用方式	
	入 庫	出 納
本学の職員	◎	×
名誉教授	◎	×
大学院学生	◎	×
研究生	◎	×
館長が認めた者	◎	×
本学の学生	×	職員出納
聴講生	×	職員出納

学生・聴講生が書庫内資料を利用ご希望の際は、「図書請求票」に所定事項を記入の上、カウンター職員にお申し出下さい。午前中受付のものは12時に、それ以降受付の分は15時に、カウンターにて資料をお渡しいたします。なお、15時以降は出納の受付をいたしません。よろしくご了承下さい。

○ 北海道南西沖地震被害報告

水産学部図書館（函館）は、先の北海道南西沖地震で書架の破損などの被害を受けた。2階建図書館の書庫（積層式3層）の3層複式書架（1台8連）10台すべてが5～15度傾き、配架洋雑誌1万6千冊の内、2千冊以上が書架から落下し散乱した。この他にも開架図書や整理中の製本雑誌などが落下、散乱した。また、別の書架2台が固定していなかったため倒れた書架の一部が破損、配架洋雑誌2千冊が散乱した。このため、地震の翌日から2日間は、図書館を臨時休館して散乱した図書、雑誌等の後片付けを行い、3日目から平常通り開館した。しかし書庫3層の利用は、書架が傾き危険な状態のため利用者の出入



りを禁止し、職員が雑誌の出し入れを行っています。地震後の数週間は、学部内の被害状況調べ、災害復旧費の予算要求の資料作成などの事務処理に追われた。7月中旬の事務局施設部の災害視察、8月後半には大蔵省北海道財務局の監査官の破損した3層書架の査定が行われた。10月には3層書架の災害復旧費が認められましたがこの経費には配架雑誌の運搬費は含まれていないため、この費用をどうするか、また、書庫内の配架雑誌の入れ替えなども検討しなければならない問題もあり、3層書架の復旧作業の実施が遅れていますが何とか年内までに実施できるよう、現在計画中です。それまでの間、利用者にはいろいろご不便をお掛けしますがよろしくお願いたします。以上、簡単ですが地震被害の報告をします。

(水産学部図書掛)

◆ 資料紹介

○ 大型コレクション

『19世紀イギリス・アメリカ演劇コレクション』について

言語文化部助教授 伊 藤 章

このたび附属図書館に收藏され、現在整理中の『19世紀イギリス・アメリカ演劇コレクション』(マイクロフィッシュ)がいかなるもので、どのような特色をもつものなのか、演劇の歴史において19世紀はいかなる時代であったのか、最後に、この資料によってどのような研究が開かれる可能性があるのか述べたい。

このマイクロフィッシュ・コレクションは、その名の通り、19世紀の英米の(有名・無名を問わない)劇作家の脚本を実に28,000本も再現したものである。何を基準に選択したかという点、イギリス部門は Allardyce Nicoll の浩瀚なイギリス演劇史、A History of English Drama、アメリカ部門は Arthur Hobson Quinn の二巻本のアメリカ演劇史、American Drama from the Civil War to the Present Day のほか、Robert Rodon の Later American Plays, 1831-1900 や Albert von Corba, Jr. の A Check List of American Drama Published in the United States through 1865 などに言及されている脚本リストに基づいている。その結果、このコレクションには、19世紀にイギリスとアメリカで上演された、英米の劇作家によるほとんどすべての芝居の脚本が収められていると言ってよい。そのほかの特色として、古典ギリシャ劇からイブセンまで、外国の芝居の翻訳も収められているし、認可を受けるためにお上に提出された未刊の芝居の上演台本も収められている。出版された芝居の場合では、初版と改定版が同時に収録されている。一本の芝居に関して、可能な限り、少なくとも三種類、すなわち検閲前の原稿と上演台本、出版されたものをマイクロフィッシュ化するというのが、編集方針であった。このプロジェクトを指揮したのは、マサチューセッツ州立大学のジョゼフ・ダナヒューとマウント・ホルヨーク大学のジェイムズ・エリスの二人の教授である。名前をあげて、その労を多としたい。

さて、演劇の歴史において19世紀はいかなる意味をもっていたか。この世紀は、ドラマツルギーにおいても、劇場建築においても、目覚ましい進展を遂げた世紀であった。都市化と市民のブルジョワ化にともない、劇場が増えた。産業革命によって、労働者階級の地位が多少

なりとも向上した。都市の下層階級でも余暇を楽しむ余裕ができた。そこで、より大衆的な芸能を提供するミュージック・ホールやヴァラエティー劇場(寄席演芸場)が出現し、人気において、より正統的な劇場を脅かすようになる。商業主義演劇は、より多様化していく観客の好みを反映するようになる。演劇のスタイルとしては、庶民好みのメロドラマもあれば、インテリ向きのリアリズムもある。悲劇もあれば、喜劇も、ファース(笑劇)もある。オペラもあれば、ミュージカルも、色気たっぷりのバーレスクもある。パントマイムもあれば、子供を対象とした児童演劇もある。また、演劇は社会批判や政治運動の道具ともなる。劇場の技術革新もめざましく、灯油やガスによる照明から、ライムライト(石灰光)、ついには電気による照明へと変わる。演劇はなにも都市の住民だけの娯楽ではなく、無数の旅回りの劇団が全国を隅なく巡業し、地方に住む人々にも大きな楽しみを提供した。

アメリカの場合、都市の勃興に伴い、1820年から30年にかけて、劇場の新築ブームが起り、ニューヨークのパワリー劇場やチャタム劇場、ラファイエット劇場、ニューパーク劇場、ボストンのトレモント劇場、フィラデルフィアのニューチェスナット・ストリート劇場、アーチ・ストリート劇場などの劇場が新築、あるいは再建された。これらの比較的大きな都市(ちなみに、1850年の都市人口は、51万5千のニューヨークを筆頭に、34万のフィラデルフィア、14万のボストン、12万のニューオーリンズ、11万5千のシンシナティ、5万のサンフランシスコ、3万のシカゴ、1万のロサンゼルスと続く)以外でも、北部地方の中小都市や、ボルチモアからサヴァンナにかけての南部の中小都市においても、次々と劇場が建った。辺境の都市、サンフランシスコには、1851年に2千人収容できる劇場ができていた。

新しく建てられた劇場は、従来のもものと比べて規模が大きくなり、たとえば、1821年のニューパーク劇場は2千5百人、1826年に完成をみたパワリー劇場は3千人、40年代に建ったブロードウェイ劇場は4千人を収容できた。劇場の大型化とともに観劇料も安くなっていく。1800年にボックス料2ドルであったパーク劇場は、1850年になると、最高料金が75セントであると宣伝する。豪華なパーク劇場以外の劇場でも、最高50セント、棧敷席5セントというのが相場である。この頃、ニューヨークはすでに演劇の中心地となり、10の常設劇場があった。次第に上演回数も増え、この頃は、1週間のうち日曜を除く毎晩、6日間上演されるのが普通であった。そして祝祭日の期間は、昼夜2回の興行を行った。劇場の設備の革新も目覚ましく、1850年代に入ると、劇場の照明はかつての蠟燭や石油ランプに代わって、ガスによる照明が導入された。このガス照明は、ガスの流れを調整することで、明度を増すことも、下げることもでき、舞台上の効果の面ですばらしい貢献をなした。

産業の革新と輸送手段の進歩も、演劇の発展に大きく貢献することになる。まず、1794年の最初のターンパイク(有料道路)の建設以来、全国のあちらこちらにターンパイクが作られる。水路としての河川の利用も、1807年にロバート・フルトンが蒸気船を実用化させて以来、活発となる。鉄道も、1828年に最初の鉄道会社が営業を開始してから、1850年までには、総延長9千マイルに及んでいた。その19年後には、大陸横断鉄道が完成し、長距離を安全に、しかも迅速に旅行するという難問が解決されることになる。こうした輸送手段の格段の進歩により、巡業劇団の巡回行程も大規模なものになっていく。1840年代の劇団は、ニューヨークを皮切りに、フィラデルフィア、ボルチモア、ワシントン、アレクサンドリア、チャールストン、サヴァンナ、コロンバスを回って、再び北上し、モビール、セントルイス、シンシナティ、ピッツバーグ、バッファローと進み、最後は南下してオールバニーで打ち上げとなるのが普通であった。それが道路と鉄道網の整備、充実ともなっていて、各劇団は文字どおり、アメリカ全土

を巡業することになる。

要するに、演劇こそ19世紀を通じて民衆の最大の娯楽であった。演劇は社会の鏡であった。時代の貌が映し出される鏡であった。時代の流れ、社会の動静に敏感に反応する、感度のよいアンテナであった。演劇に社会の最大公約数的な部分が、もっとも民衆的な部分が表現されていると言ってもよい。それは、十九世紀においては、演劇が娯楽と情報の源として、社会の中心により近く位置していたからだ。演劇以上に社会と密接に結び付いているジャンルはほかにはない。特にアメリカの場合、演劇は雑多な多民族社会アメリカを統合する共通のシンボルとして機能してきた。

最後に、ここに収められた演劇作品が研究者にとってどういう価値があるのか述べよう。まず、イギリスであれ、アメリカであれ、このコレクションを通して精神の形や時代の雰囲気、民衆の気分、社会の顔付きを探ることができよう。社会を支える理念、民衆をつき動かす衝動を再現することも可能になるだろう。このコレクションは、演劇の発展の歴史をたどりたいと思う演劇史家にとって、貴重な資料となるだけではない。19世紀に生きた人々を考え、何を夢見ていたか、庶民の心性を掘り起こしたいと思っている歴史家にとっても、19世紀の時代精神を掘り起こそうと思っている思想家にとっても、汲めども尽きない泉のように、第一次資料の豊かな源泉となってくれるはずだ。

○ 平成4年度特別図書購入費で購入した資料

Signs: Journal of Women in Culture and Society. 1975-1986

(文化・社会的視点からの女性研究誌)

1970年以降隆盛をみている女性研究のうち、アメリカにおける研究を中心に編集されている。都市社会における女性の就労、家族、性別、役割、社会参加などの今日的課題をエッセイ、教育、社会移動などと関連づけながら取り上げている。

Москва—History, Architecture Monuments. 16 titles on 153 positive microfiche

(モスクワの歴史、建築物、記念碑)

1147年のモスクワの起りから1930年代半ばまでの歴史を記述。18世紀科学アカデミー出版物、19世紀の統計資料、歴史的建築物、記念碑の紹介、革命前の旅行案内、タウンガイドなどモスクワに関する出版物を網羅的に収集したもの。

Myanmar Tripitaka. 全40巻

(ビルマ版 大蔵経)

パーリ語三蔵(大蔵経)全体を包括するもの。律蔵5巻、経蔵21巻、論蔵12巻、蔵外2巻の計40巻からなる。ビルマ文字による印刷。

Pioneers in Economics Series. Section III: Neoclassical Economics and its critics. Vol. 24-35. 1992.

(経済思想の開拓者たち 第3部: 新古典派経済学とその批判者たち)

17世紀から現代までの主要な経済学者たちを取り上げて、その批判的評価を試みる代表的

楡 蔭 (北大図書館報)

な論文を収集したものである。

Journal of Business Venturing. Vol. 1-5. 1986-1990

(事業ベンチャリング誌)

ベンチャー企業、社内ベンチャー、企業者活動に関する学術雑誌。

Economie et comptabilité. 1963-1986

(経済と会計)

フランス公認会計士協会の基幹雑誌で、フランス及びヨーロッパ全域の会計問題、及び経済との関連における会計問題を扱った論文を掲載する雑誌。

**近代日本軍隊関係雑誌集成 1: 内外兵事新聞, 月曜会記事, 保守新論,
偕行社記事. 52 リール**

陸軍将校をもって構成員とする月曜会、偕行社の機関誌である。戦略、戦術論、軍隊組織編成論、戦史研究、火器の技術と操作、軍隊教育論、国民教育論、軍関係法規の解説、各国軍事情勢、視察報告などを主要な内容としている。

**International Social Security Review (Bulletin of the International
Social Security Association) 1948-1976. Vol: 1-29**

(国際社会保障協会会報)

1927年にブリュッセルに創設された協会で、世界各地における社会保障の保護、促進、発展及びその技術・行政面における改善等のための国際協力組織の機関誌。

帝国議会報告集成 全8巻 明治23年～昭和20年

戦前期の帝国議会において、会期ごとに各政党が国民、選挙民むけに発刊した「議会報告書」をすべて網羅したものである。従来、個別的な形でしか利用出来なかった資料を全て収集し復刊したもの。

衆議院・参議院各委員会会議録 1991-1992

国会、衆議院、参議院の実質審議場である各委員会すべての発言を速記収録したもの。

◆ **本学教官著作物 (本館・分館受贈分)**

本学教官の方々から附属図書館に下記の著作図書を御寄贈いただきました。

[本 館]

○ **名誉教授**

藤 田 宏 達 The Larger Sukhāvativyūha: Romanized Text of the Sanskrit Manuscripts from Nepal, Part 2. The Sankibo Press 1993

○ **経済学部**

小林好宏 (共著) なぜなにエコノミー たくぎん総合研究所 1993

宮 本 謙 介 東南アジアの現在: カンボジア, Asean そして日本 (ほるぶ 150 ブックス) ほるぶ出版 1993

○薬学部

上野直人 形づくりの分子メカニズム (実験医学バイオサイエンス 10) 羊土社 1993

○農学部

霜鳥茂 楡影の日々 [私家版] 1993

[教養分館]

○文学部

土屋博(編著) 聖と俗の交錯：宗教学とその周辺 北海道大学図書刊行会 1993

附属図書館では、本学教官著作物をできる限り収集するようつとめております。今後とも、よろしくご協力下さい。

◆ 会 議

平成5年度国立大学附属図書館事務部課長会議 <平成5年6月8日(火)>

当番校：東京医科歯科大学

議 題

大学図書館の当面する諸問題について

第40回国立大学図書館協議会総会 <平成5年6月23日(水)~24日(木)>

場所：徳島東急イン

協議事項等

第1日

1. 予算・決算等協議会の維持・運営に関する諸事項
2. 平成5年度事業計画(案)について
3. 文部省所管事項説明
4. 研究集会「大学図書館の活性化—自己点検・自己評価とその活用—」

第2日

1. 分科会(図書館の予算・人事、運営・サービスについて)
2. 全体会議

第152回図書館委員会 <平成5年7月8日(木)>

議 題

1. 平成4年度決算及び平成5年度予算配当(案)について
2. その他

第112回教養分館委員会 <平成5年7月22日(木)>

議 題

1. 平成5年度教養分館図書予算(案)について
2. 平成5年度参考図書・視聴覚資料の選定について
3. その他

◆ 研修・講習等

○NACSIS-IR (地域) 講習会 (5.7.7~8)

(主催) 学術情報センター及び北海道大学 (場所) 北海道大学附属図書館
受講者 24名

○平成5年度大学図書館職員長期研修 (5.7.19~8.6)

(主催) 文部省及び図書館情報大学 (場所) 図書館情報大学他
参加者 松本 禮一 (情報管理課図書受入掛)

○平成5年度図書館等職員著作権実務講習会 (5.7.28~7.30)

(主催) 文化庁 (場所) 東京大学
参加者 伊藤 啓子 (医学部) 土田 健治 (工学部)
田中 道子 (低温科学研究所)

○平成5年度目録システム (地域) 講習会 (5.9.6~10)

(主催) 学術情報センター (場所) 北海道大学附属図書館
受講者 12名

○第6回国立大学図書館協議会シンポジウム (5.9.21~22)

(主催) 国立大学図書館協議会 (場所) 放送大学
参加者 羽川 明 (情報サービス課相互利用掛長)
テーマ「NACSIS-ILL サービスの現状と課題」

○平成5年度(第4回) ILL システム講習会 (5.10.26~27)

(主催) 学術情報センター (場所) 学術情報センター
参加者 斎藤 寿美子 (獣医学部)

○平成5年度(第1回) 総合目録データベース実務研修 (5.9.27~10.22)

(主催) 学術情報センター (場所) 学術情報センター
参加者 岸本 一志 (情報システム課目録情報掛)

◆ 講演会等

○第36回北海道地区大学図書館職員研究集会 (5.8.6)

(主催) 北海道地区大学図書館協議会 (場所) 札幌医科大学

○平成5年度全国図書館大会 (5.9.29~10.1)

(主催) 日本図書館協議会 (場所) 札幌

○平成5年度北海道大学図書館講演会 (5.10.7)

(主催) 北海道大学附属図書館 (場所) 北海道大学附属図書館

◆ 人事往来

○ 採用

野澤尚央 工学部図書整理掛 5.10. 1
 平野知 農学部図書整理掛 //

○ 配置換

落合典子 教養部(工学部図書閲覧掛) 5.10. 1
 永山裕子 工学部 //

○ 転入

<配置換>

杉尾末希子 工学部図書閲覧掛(東京工業大学) 5.10. 1

○ 退職

岩本攻 農学部図書整理掛 5. 5.21
 高橋忠明 工学部図書整理掛 5. 6.30
 伊藤美保子 教養部 5. 9.30
 山本将子 工学部 //



本学発祥の地(東京・芝公園内)
 (東京エルム会提供)

北海道大学附属図書館報「楡蔭」(ゆいん) 通号 88 号
 平成 5 年(1993 年)11 月 30 日 発行 発行人 附属図書館事務部長 金井 孝
 編集事務 山本幾夫・阿部勝義・岡田 潔・菅原英一・佐藤清一・午来信子・
 岸本一志・佐藤依理子・松尾博朋・伊藤啓子・土田京子・栄森義晴
 発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北 8 条西 5 丁目 716-2111 (2967)
 印刷所 文栄堂印刷所 札幌市中央区北 2 条東 12 丁目 231-5560・5561